

小豆島オリーブ牛のブランド力強化と担い手確保の取組

■ 小豆島オリーブ牛研究会 ■

(小豆農業改良普及センター 政木 哲哉)

●対象の概要

小豆島は、110年の歴史を誇るオリーブの産地である。そのオリーブを牛の飼料に活用できないかと小豆島の畜産農家が試行錯誤の末、オリーブ採油粕の飼料化に成功し、平成22年に肥育農家3戸により、小豆島オリーブ牛研究会が設立された。

同年5月、初出荷した「小豆島オリーブ牛」の肉質が市場で高く評価されたことから、翌23年に管内全域で量販体制の取組が始まり、「オリーブ牛」が誕生した。

現在、6戸（小豆島2、豊島2、小豊島2）の肥育及び繁殖農家が研究会に加入し、年間約140頭の「小豆島オリーブ牛」を生産している。

●課題を取り上げた理由

土庄町の石井正樹氏の発案でオリーブ採油粕を黒毛和牛に給与することにより、旨みが濃厚なのに脂があっさりしているといった特徴のある「小豆島オリーブ牛」が誕生した。

そして、この取組は県内全域に広がり、讃岐牛に付加価値を付けた「オリーブ牛」の発展へとつながった。

しかし、飼料や素牛価格が持続的に高騰する中、肥育経営の収益性は伸び悩んでいるため、ブランド力を強化し、高値販売による所得向上を図る必要があった。

また、オリーブ牛を生産する担い手は、高齢化により減少しており、新規参入も親元就農以外事例がないことから、オリーブ牛を次世代へと継承していくことが重要な課題となっていた。

さらに、オリーブ飼料は順調に生産されていたが、オリーブ採油粕の脱水液をほ場に灌水すると、オリーブの生育に支障が生じる事例がみられ、脱水液の処理についても検討することとなった。

そこで、オリーブ牛のブランド力の強化に向けて高品質化やオリーブ飼料の安定生産への支援、オリーブ牛を次世代へと継承するため、担い手対

策に取組むこととなった。

●普及活動の経過

1 肥育成績向上に向けた取組

高品質な肉牛を安定的に生産し、ブランド牛として確固たる地位を確立するために、小豆総合事務所家畜保健衛生室、J A東讃畜産振興センター小豆駐在、香川県農業共済組合中央家畜診療所と連携して、毎月、現地指導や情報提供を行った。

また、管内から出荷された肥育牛について、農家別や種雄牛別の格付けや枝肉重量、販売単価などの成績を分析し、肉質改善に向けた活用を支援した。

2 オリーブ飼料の安定生産を支援

オリーブ飼料を生産する企業とオリーブ採油粕の脱水液の処理方法について検討し、脱水液を貯蔵するタンクと空気供給用のポンプの導入支援を行った。



オリーブ採油粕の脱水液の貯蔵タンク

3 新規就農者確保への取組

小豆島では、農業法人や他産業に勤めていた者が独立したり、移住者が新規参入する事例が増えているため、肉牛部門においても就農希望者が経営を開始する際に、参考となるよう就業就農マニュアルを作成した。

4 「オリーブ牛」のPR活動

各種のイベントで町、観光協会、J A香川県等

関係機関と協力して、研究会が実施するオリーブ牛のPR活動を支援した。

夏の観光シーズンを迎える7月に、小豆島の玄関口となる土庄港で、小豆島オリーブ牛の試食イベントを開催した。

また、豊島の棚田収穫祭では、小豆島オリーブ牛の試食フェアを開催し、他県産和牛との食べ比べを行い、試食後にアンケートを実施した。

●普及活動の成果

1 肥育成績の向上

関係機関との連携した指導によって、肉質等級は4等級以上の上物率が80%を上回り、肥育成績が向上し、高品質化が図られた。

今年度の県畜産共進会（第4部肉用牛の部）では、小豆島オリーブ牛が最優秀に輝き農林水産大臣賞を受賞した。

また、5年に1度開催される全国和牛能力共進会において、2大会連続で小豆島オリーブ牛が県代表牛に選出された。



全国和牛能力共進会宮城大会に出品

2 オリーブ飼料の安定生産

オリーブ飼料を生産する企業が、オリーブ採油粕の脱水液貯蔵タンクを2基設置し、脱水液に空気を送り込むことにより有機物の分解が促進され、オリーブの剪定屑と混合して発酵処理後には場還元することが可能となり、オリーブ飼料の安定生産に寄与することができた。

また、他県での類似品の流通を防ぐため、特許を出願していたが、平成30年3月に特許庁から「オリーブ飼料」の製造方法について、特許が認められた。

3 就農希望者への支援

オリーブ牛の経営に取組み意向のある土庄町出身の就農希望者があり、小豆島オリーブ牛研究会会長、JA香川県、町、農業共済組合など関係機関を参集し、今後の就農に向けて、支援制度の

紹介等、情報提供を行った。

来年度、家畜人工授精士の免許の取得を目指していることから、今後、円滑に就農できるよう関係機関と連携して経営計画を支援していく。

4 ブランド化の定着

オリーブ牛のPR活動の効果でブランド力が向上し、市場で高く販売されるようになった。

テレビや雑誌などで、小豆島オリーブ牛がマスメディアに取り上げられる機会が増えており、オリーブ牛を考案した石井正樹氏の牧場には、国内外からバイヤーやシェフ、消費者団体など多くの関係者が年間を通して視察に訪れるようになり、その知名度は格段に向上した。

小豆島オリーブ牛を試食したアンケートでは、他県産和牛に比べて「柔らかい」、「脂があっさりしている」等、好評であった。



豊島の棚田収穫祭（試食フェア）

●今後の普及活動の課題

1 オリーブ牛の次世代への継承

新たなオリーブ牛の担い手を確保するため、新規就農者の掘り起こしも必要であるが、肉牛経営は、施設や機械などの初期投資が必要なことから、就農希望者を受け入れる経営環境を整備していく必要がある。

2 オリーブ飼料の安定的な生産と供給

管内では、採油機を導入して自社ブランドのオリーブオイルの製造・販売に取り組むオリーブ栽培農家も増加しているため、オリーブ飼料を給与した畜産物の需要動向に即して、オリーブの飼料化を促進し、安定的にオリーブ飼料を生産・供給していく体制を構築していく必要がある。